

ものづくり de 教育

Vol.27 Feb. 2011

Topics

- 全員で乗り越えたプロジェクト
- 「相手意識に立つものづくり科」
- キーワード：こどもモード
- 1期生レポート⑩

東京学芸大学教育学部
小学校教員養成課程
《ものづくり教育選修》
二期生募集を
行いました！



ひとりひとりの、全員で乗り越えたプロジェクト

「ものづくり教育演習Ⅱ」では、各学生が自分で考えたプロジェクトを実行する過程を記録し、分析することが求められています。なぜ自分はそれをやりたいと思うのか、何のためにそれをやるのかなど自問自答していきますが、一人で考え、作業も多い中で、仲間という意味にも気づきました。今回は、その学生たちの様子を演習室で間近に見ている研究員の新名がレポートします。

「ものづくり教育演習Ⅱ」は、全体が集まる90分の授業は報告とアドバイスの場になり、企画を進めるペースメーカーになっています。したがって、実際に企画を考え、実行していくのはそれ以外の時間になります。授業時間外に活動しなければ、授業だけでは成果は得られません。当然、毎日他の授業があり課題も出ます。サークルもバイトもある中で、時間を作らなければなりません。うまく時間を使えず、一週間進められないことや、やるべきことが重なってしまって自分の許容量を超えてしまうこともありました。悩みの一つを挙げると、学科内の友人に相談することや手伝ってもらったことでした。各自、自分のプロジェクトでのやるべきことで手一杯です。そこに、どうしても一人の手には負えないことが出てきた時に、手伝って欲しいと言うことは簡単ではありませんでした。友人も大変なことが解るから、頼るのは申し訳ないという気持ちで、とまどってしまうのです。しかし、それを打開したのは助け合いの気持ち。困ってる人をみつけられる周りを見渡す目でした。「手伝おうか？」のひとことで救われていく表情を多く見ました。最初に助けてもらった人は、今度は自分が力になる、という善意のバトンが手渡され続けた期間となりました。学生たちは、協力の輪で乗り越えた各自のプロジェクトで、実行・達成した以上の、大きな力を身につけたように見られました。

推進教員レポート：長野県諏訪市小・中一貫

「相手意識に立つものづくり科」2010年度実践報告会に参加しました 坂口謙一

本紙21号(2010-8)でも紹介した長野県諏訪市の独自の取り組み、小1から中3までの9年間を一貫した特設必修教科「相手意識に立つものづくり科」の2010年度実践報告会が、去る2011年2月17日に諏訪市文化センターで開催され、参観してきました。

各校(小7, 中4の計11校)の発表を見聞して、諏訪市の「ものづくり科」は、すべての子どもを対象とした普通教育としての技術教育の観点から見た場合、豊かな発展の可能性を秘めた注目すべき取り組みだと改めて感じました。それはなんとと言っても、諏訪市がめざしている「ものづくり」が、たんなる個人的・



趣味的な製作活動ではなく、人と人、人とモノ、モノとモノとの関連性が織りなす社会性豊かな「ものづくり」であり、モノが企画・設計され、製作され、使用・消費されるまでの一連のプロセスの全体を見通した協同的な取り組みを志向しているからです。

とくに今回の発表で印象に残ったのは、「子どもたちは、相手意識があればこそ、ものづくりに夢中になれる」という先生の分析(S小)や、同様に、「作ることの意義と家族への思いが、まだまだ不器用で、なれない手さばきの子どもたちが、精一杯作ろうとする原動力になるんだな」と感じたという先生の捉え方(J小)でした。また、S中では、中学3年生段階では「使い手に責任を持って渡すことのできる製作品が製作できる」ようになることをめざしたとされ、小学生とは異なる中学生の発達課題を的確に捉えようとした示唆深さがあると感じました。

もちろん、実践の内容として印象に残ったことも多々ありました。たとえば、子どもたちが栽培したアサガオのつるを材料にしたリースづくり(K小)、子どもたちが学校で飼育しているヒツジ「ももこちゃん」の羊毛を使ったフェルトボールづくり(T小)は、動植物の栽培・飼育を社会的なものづくりの観点からダイナミックに捉えている点で、まさに今日の教育課題に応えようとしている実践だと思いました。

本文に添付した画像は、子どもたちがこの「ものづくり科」で製作した物品を実際に「商品」として市民に販売する体験学習「チャレンジショップ」の様相です(2010年12月18日、諏訪市文化センターにて開催)。ものすごく熱気溢れる集いでしたよ。



▲ 売り込みも自分たちで考え、多くのお客さんを呼べるように工夫した。



こどもモード 【造語】よみ：こどもーど

No.023

- ①「こども」と「モード」を組み合わせた造語 (by 東京学芸大学こども未来プロジェクト)
- ②「子どものように何かに夢中になっている人」を表現した言葉
- ③心のどこかに眠っている「子どもの頃の自分」を呼び起こす合言葉として東京学芸大学こども未来プロジェクトの活動を支える理念

東京学芸大学こども未来プロジェクト：<http://www.u-gakugei.ac.jp/~codomo/index.html>

【解説】子どもと一緒に何かをしている時、子どもについて何かを考えている時、ふと自分が『こどもモード』になっていることに気づくことでしょうか。子どもと接する時、きっと誰もが〈おとな〉から〈こども〉へ「モードチェンジ」しているのだと思います。それは「大人もかつては子どもだった」からかも知れません。(上記は東京学芸大学こども未来プロジェクト HP より抜粋引用 <http://www.u-gakugei.ac.jp/~codomo/pg51.html>)

大学では、様々なプロジェクトが動いている。そして、大学教員それぞれが1つのプロジェクトにかかわっているのではなく、複数のプロジェクトに関係している。学生たちも同様である。そのほとんどが、東京学芸大学ならではの教育に関連したプロジェクトとなっている。上に挙げた、「東京学芸大学こども未来プロジェクト」も学生が参加できるプロジェクトのひとつである。かかわっている学生たち選修や専攻を超えて協力し、「こどもモード」イベントなどを行う。このプロジェクトには、ものづくり教育選修では現在のところ、石井壽郎先生、新名佐和子先生と筆者が関わっている。「ものづくり教育選修」と「東京学芸大学こども未来プロジェクト」をみて重なる部分や違いを考えてみるのも興味深い。(鉄矢)

ものづくり教育選修

1期生レポート

第10回 田中慶「東京」

2月9日、ものづくり教育選修の軸の教科である「ものづくり教育演習」の、秋期最終プレゼンテーションがありました。この授業では、各々が秋期を通して行って来た、自らに課したプロジェクトの最終報告を一人10分程度の時間内で行いました。今回私は、「東京MAPを作ろう」というテーマでプロジェクトを遂行してきました。

私は富山県出身という田舎者です。そんな私は、東京への強い憧れでこの大学に入学しました。「どんなプロジェクトをしようか？」と考えたとき、憧れた東京を知るためにピッタリなプロジェクトだと思い、東京MAPを作ることに決めました。まず私の考える「東京といえば」代表の街、新宿、渋谷、原宿に行きました。そこは、今まで緑が生い茂る田舎で育った男にとって、全てが違うものでした。ここまで建物が連なっている風景は見たことも無いし、人が多い事にとてつ無量に圧倒されました。富山県民全員合わせても勝てないと思わせるくらい多く、東京と富山とのギャップを感じさせられました。

土地のギャップだけではなく、生活する上でのギャップもあります。自転車を置くのにお金がかかり、毎日置くために定期を買う必要があります。さらに、定期を買うために順番を待つ必要があり、私は2カ月ほど待ちました。地元では無料だったので、驚きました。私は、東京を知る＝いろんな場所に行ってみることだと考えていましたが、日々の生活からも東京を知ることが出来るのだと活動を通して感じました。

さて、この活動は当初、地図作りをしようと思っていましたが、地図＝MAP だけではないと指摘され、考えた結果、ブログ形式にしました。最初は自分の好きなように書いていましたが、「つまらない」という感想をもらいました。それを受け、面白くするために試行錯誤を重ねましたが、なかなか納得のいくものになりません。ある日、アドバイスを受け、ブログの中に「自分」というものが無かったことに気づかされ、記事の中に「自分にしか知らないこと」を織り込むように記述してみました。すると、すぐに「面白くなった」と言われました。

私はこの活動を通して、フットワークが軽快になったと思います。東京に来たにもかかわらず、ほとんど学校と家の行き来のみで、たまに定期券の範囲内の場所に行くくらいでした。しかしいろんな場所に行くと、もっともっと東京を知りたいという気持ちが高まりました。その根底には、知らないことを知ることは楽しいという心があると思います。さらに、他者を意識できるようにもなりました。どうすれば他者が面白いブログになるのだろう？他者には書けないブログとはなんだろう？といういろいろ考えるうちに、いろんな面で他者の存在に気づいたのでした。

自分の興味のあることを通して自己成長が見込めるのはこの学科の良いところだと思っています。今、私は東京を歩いています。残りの3年間の大学生活の中で、東京だけにとどまらず、まずは日本国内のいろんな場所に行き、さらには国外にも行ってみたいと思うようになりました。とにかく、時間を有効に活用し、さらなる自己成長を試みようと思います。

◆このコーナーでは毎月一期生が気になっていることを順番にレポートしていきます。